
2017 年度日本語教育センター活動報告

1. 2017 年度日本語教育センター運営体制

運営委員会

センター長：丸山 千歌	(異文化コミュニケーション学部教授)
副センター長：東條 吉純	(法学部教授)
運営委員：佐々木 一也	(文学部教授)
運営委員：杜 国慶	(法学部教授)
運営委員：巖 成男	(経済学部准教授)

実務委員会

センター長：丸山 千歌	(異文化コミュニケーション学部教授)
副センター長：東條 吉純	(法学部教授)
センター員：池田 伸子	(異文化コミュニケーション学部教授)
センター員：巖 成男	(経済学部准教授)
センター員：藤田 恵	(教育講師)
センター員：金庭 久美子	(教育講師)
センター員：数野 恵理	(教育講師)
センター員：嶋原 耕一	(教育講師)
事務局：阪下 利哉	
事務局：吉田 知子	
事務局：山崎 真紀子	

兼任講師

浅野 有里	長島 明子
井上 玲子	西内 沙恵
小柳津 成訓	長谷川 孝子
神元 愛美子	東平 福美
川端 芳子	開 めぐみ
草木 美智子	平山 紫帆
小森 由里	保坂 明香

佐々木 藍子	三浦 綾乃
沢野 美由紀	桃井 菜奈恵
清水 知子	森井 あずさ
高嶋 幸太	守屋 久美子
武田 聡子	山内 薫
谷 啓子	山辺 真理子
富倉 教子	山森 理絵

2. 活動報告

日本語教育センターホームページにて3月末公開予定

<https://cjle.rikkyo.ac.jp/reports/default.aspx>

目次（予定）

1. 各科目についての報告
2. 2017年度 Placement Test 実施報告
3. 2017年度日本語相談室実施報告
4. 2017年度立教大学漢字検定試験実施報告
5. 2017年度日本語自主学習用図書貸し出し実施報告
6. 留学生による日本語スピーチコンテスト実施報告
7. 日本語教育センターシンポジウム実施報告
8. 日本語教育センターニュースレター発行報告
9. 短期日本語プログラム報告
10. センター員活動報告
11. 2017年度FD記録

日本語教育センターセンター員 教育研究業績一覧

池田伸子

著書

1. 『新界標日本語 総合教程 (4)』復旦大学出版社、2017年、(徐敏民・丸山千歌主編、編集を担当)
2. 『新界標日本語 練習冊 (4)』復旦大学出版社、2017年、(徐敏民・金庭久美子主編、編集を担当)

論文

1. 「多様なニーズに対応可能な日本語教員養成プログラムの開発——シミュレーションによる態度変容可能性の検討——」『日本語・日本語教育』第1号、1-17.
2. 「多様なニーズに対応可能な日本語教員養成プログラムの開発——映像教材利用の可能性——」『日本語教育実践研究』第6号、立教日本語教育実践教育学会 (印刷中)

発表

1. 「留学⇒グローバル人財？」一橋大学・津田塾大学経済学研究会主催シンポジウム、「グローバル化時代における人材教育」、於一橋大学、2017年11月25日
2. 「短期日本語プログラムからみる日本語教育(センター)の可能性」立教大学日本語教育センターシンポジウム2017、於立教大学、2017年12月2日

研究助成

1. 2015.4～至現在 科学研究費助成金(基盤研究(C))「ディスレクシア学習者に対する実現可能で個別的な日本語教育支援体制の構築」(研究代表者)(課題番号:15K02657)
2. 2017.4～現在 科学研究費助成金(基盤研究(C))「大学日本語教育プログラムを対象とした開発型評価——持続可能で有用な開発型評価とは」(研究分担者)(課題番号:17K02863)

丸山千歌

著書

1. 『新界標日本語 総合教程 (4)』復旦大学出版社、2017年、(徐敏民と共同主編集)
2. 『新界標日本語 練習冊 (4)』復旦大学出版社、2017年、(徐敏民・金庭久美子主編、編集を担当)

論文

1. 「Can-do statements を活用した教育実践の質的向上と教師教育」『日本語教育実践研究』

第6号、立教日本語教育実践教育学会（印刷中）

2. 「ある翻訳者が自立に至る径路——移動して学ぶ時代の日本語教育への示唆——」『日本語・日本語教育』第1号、立教大学日本語教育センター（小澤伊久美との共同執筆）、19-35.

研究助成

1. 2016.4～現在 科学研究費助成金（基盤研究（C））「移動して学ぶ」時代の日本語教育——留学体験の意味づけの変容・維持過程の分析から」（研究代表者）（課題番号：16K02824）
2. 2017.4～現在 科学研究費助成金（基盤研究（C））「大学日本語教育プログラムを対象とした開発型評価——持続可能で有用な開発型評価とは」（研究分担者）（課題番号：17K02863）

藤田 恵

著書

1. 『新界標日本語 総合教程（4）』復旦大学出版社、2017年、（徐敏民・丸山千歌主編、編集を担当）
2. 『新界標日本語 練習冊（4）』復旦大学出版社、2017年、（徐敏民・金庭久美子主編、編集を担当）

報告

1. 「多様なレベルの学習者を対象とした漢字クラスの開発」『日本語・日本語教育』第1号、立教大学日本語教育センター、85-91.

数野恵理

報告

1. 「内容を重視した日本語演習3の試み——学習者の読みに対する意識の変化を中心に——」（嶋原耕一との共同執筆）『日本語・日本語教育』1号、立教大学日本語教育センター、2018年、93-104.

研究発表

1. 「小説の理解を深める中級前半日本語の演習コースの試み」（嶋原耕一との共同ポスター発表）第49回日本語教育方法研究会、於筑波大学、2017年9月16日

金庭久美子

著書

1. 『新界標日本語 総合教程（4）』（徐敏民、丸山千歌主編、金庭久美子編集担当）復旦大学出版社、2017年
2. 『新界標日本語 練習冊（4）』（徐敏民、金庭久美子主編）復旦大学出版社、2017年

研究論文

1. 「韓国人日本語学習者の断りのメール文の特徴——読み手により印象を与えない表現を中心に——」『日本語学研究』第55輯（金蘭美・金玄珠との共同執筆）、韓国日本語學會、2018年（投稿中）
2. 「メール文の自動評価に向けて——メール作成タスクの検討——」『日本語・日本語教育』第1号、立教大学日本語教育センター、2018年（印刷中）
3. 「ビジネス日本語プログラムにおける複眼的評価の有効性」『日本語教育実践研究』第6号、（栗田奈美との共同執筆）、立教日本語教育実践教育学会、37-53.

研究発表

1. 「メール作成タスクを用いた作文支援システム」（川村よし子・橋本直幸・小林秀和との共同発表）、ポスター、CASTEL/J2017、於早稲田大学早稲田キャンパス、2017年8月5日
2. 「日本語タスク別メール文における——ドイツ語母語話者の使用状況——」、口頭発表、第30回日本語教育連絡会議、於 Oldenburg 市民大学（ドイツ）、2017年8月26日
3. 「相手の要求に応じられない場合の対応の仕方——メール文における日本語母語話者と日本語学習者の違い——」（金蘭美・橋本直幸・川村よし子との共同発表との共同発表）、ポスター発表、第49回日本語教育方法研究会、於筑波大学、2017年9月16日
4. 「メール文に見られる読み手配慮の日韓比較」（金蘭美・金玄珠との共同発表）、口頭発表、韓国日本語學會第36回国際學術發表大會、於白石藝術大學校（韓国）、2017年9月23日
5. 「連語に配慮したやさしい日本語書き換えシステムの構築」（川村よし子・山森理恵との共同発表）、ポスター発表、韓国日本語學會第36回国際學術發表大會、於白石藝術大學校（韓国）、2017年9月23日

その他

1. ワークショップ、「生きた素材による日本語聴解教材の開発——『日本語なりきりリスニング』を中心に——」、於 LMU München, Prof.-Huber-Pl. 2 (V) -（ドイツミュンヘン大学）、2017年8月24日
2. 研修会、「生きた素材による日本語教育～『日本語なりきりリスニング』を中心に～」、2017年10月14日、於凡人社大阪事務所 凡人社日本語サロン研修会 主催：凡人社 共催：ジャパンタイムズ

研究助成

1. 2015.4～至現在 科学研究費助成金（基盤研究（C））「タスク別書き言葉コーパスを利用したメール文のweb自動採点システムの開発」（研究代表者）（課題番号：15K02658）
2. 2015.4～至現在 科学研究費助成金（基盤研究（B））「多義語の意味の自動特定機能を組み入れたやさしい日本語による読解支援環境の構築」（研究分担者）（課題番号：15H03219）

嶋原耕一

研究論文

1. 「内容を重視した日本語演習3の試み —— 学習者の読みに対する意識の変化を中心に ——」
(数野恵理との共同執筆) 『日本語・日本語教育』立教大学日本語教育センター、2018年、
93-104.
2. 「大学生同士の初対面雑談会話で用いられる文末表現としての「みたいな」—— スピーチ
レベルとの関係に注目して ——」 『日本語・日本語教育』立教大学日本語教育センター、
2018年、55-68.

研究発表

1. 「日本語母語話者と非母語話者の初対面雑談会話における国事情談話の相互行為分析」 社
会言語学会第40回大会、於関西大学、2017年9月16日
2. 「小説の理解を深める中級前半日本語の演習コースの試み」(数野恵理との共同発表) 日
本語教育方法研究会第49回研究会、於筑波大学、2017年9月16日
3. Conversation Analysis of Stereotypes Negotiated and Established by Native Speakers
and Non-native Speakers of Japanese The 17th Annual Hawaii International Confer-
ence on Education、於 Hilton Hawaiian Village Waikiki Beach Resort、2018年1月7日

執筆者一覧（掲載順）

研究論文 Research Papers

池田 伸子 (IKEDA, Nobuko)	異文化コミュニケーション学部教授
丸山 千歌 (MARUYAMA, Chika)	異文化コミュニケーション学部教授
小澤伊久美 (OZAWA, Ikumi)	国際基督教大学日本語教育課程課程准教授
金庭久美子 (KANENIWA, Kumiko)	日本語教育センター教育講師
嶋原 耕一 (SHIMAHARA, Koichi)	日本語教育センター教育講師
平山 紫帆 (HIRAYAMA, Shiho)	日本語教育センター兼任講師

実践報告 Practice Reports

藤田 恵 (FUJITA, Megumi)	日本語教育センター教育講師
数野 恵理 (KAZUNO, Eri)	日本語教育センター教育講師

調査報告 Research Reports

小森 由里 (KOMORI, Yuri)	日本語教育センター兼任講師
長谷川孝子 (HASEGAWA, Takako)	日本語教育センター兼任講師
高嶋 幸太 (TAKASHIMA, Kota)	日本語教育センター兼任講師
佐々木藍子 (SASAKI, Aiko)	日本語教育センター兼任講師
猪口 綾奈 (INOGUCHI, Aya)	早稲田大学非常勤講師

『日本語・日本語教育』規定

1. 投稿資格

立教大学日本語教育センター員、日本語教育センター科目担当兼任講師、および当センターにおいて適当と認められた者とする。ただし、共著の場合、前述の教員が1名含まれていなければならない。

2. 内容

日本語教育およびその関連領域。未発表の原稿に限る。

3. 使用言語

日本語または英語とするが、編集委員会で認められた場合、それ以外の言語でもよい。

4. 書式

原稿は横書きで、MS Word 形式ないしテキストファイル形式とし、A4判の用紙（40字×35行）で、研究論文は20枚以内、実践報告及び調査報告は16枚以内とする。図表、参考資料、参考文献、注などもこの分量の範囲に含める。文献等の書き方は、『『日本語・日本語教育』執筆要領』に従うこと。

5. 要旨

和文（400字以内）と英文（200語以内）の要旨をつける。また、日本語と英語でそれぞれ5語以内でキーワードを付す。

6. 採否の決定

原稿の採否は本誌編集委員会が決定し、本人に通知する。

7. 編集委員

編集委員会は、日本語教育センター員から選出された4名の委員によって構成する。編集委員の任期は1年とするが、再任は妨げない。

8. 本誌の発行は年1回とする。

9. 原稿の送付

次の①～③を下記に郵送すること。

①原稿本体（A4判）1部

②原稿本体から次のものを抜き出した別紙1（A4判）1部

- カテゴリー（研究論文、実践報告、調査報告、のいずれか）
- タイトル及び英文タイトル
- 著者名（和文表記とアルファベット表記）
- 和文要旨（400字以内。要旨末尾に括弧書きで文字数を記載のこと。）
- 英文要旨（200語以内。要旨末尾に括弧書きで文字数を記載のこと。）
- キーワード（原稿中の主要語句を5語以内、日本語と英語で記載すること。）

③執筆者氏名、所属機関名、職位を記した別紙2（A4判）1部

また、MS Word形式ないしテキストファイル形式のデータを下記のアドレスに送信すること。

「日本語・日本語教育」編集委員会

〒171-8501 東京都西池袋3-34-1 日本語教育センター内

E-mail: nihongo-kiyo@rikkyo.ac.jp

『日本語・日本語教育』執筆要領（和文論文）

1. 投稿原稿の構成

投稿原稿は、次の部分から構成されるものとします。この順序で書いてください。

- (1) タイトルおよび英文タイトル
- (2) 要旨（日本語 400 字以内。英語 200 語以内。要旨末尾に括弧書きで文字数を記載のこと。）
- (3) キーワード（原稿中の主要語句を 5 語以内、日本語と英語で示すこと。）
- (4) 本文（図表を含む）
- (5) 注（必要に応じて）
- (6) 引用文献・参考資料一覧

2. 投稿論文のカテゴリー

(1) 研究論文：

日本語教育および関連領域について、十分に先行研究を把握した上で述べられているもの。

A：先行研究を十分に把握した上でたてた仮説の検証を行っている実践的論文。

B：先行研究を十分に把握した上でたてた仮説の検証を行っている調査論文。

C：先行研究を十分に把握した上で行っている日本語教育に関する提案、提言。

D：これまでに行われている研究、調査論文の総括および解説。

(2) 実践報告：

教育現場における実践の内容、効果等が具体的、かつ明示的に述べられているもの。

(3) 調査報告：

言語データ、史的資料、教育の現状分析や関連する意識調査の結果など、日本語教育にとって資料的価値が認められる報告が明確に記述され、結果の分析が行われているもの。

3. 投稿原稿の書式・分量

- 投稿原稿は「A4 判横書き、40 字× 35 行」で作成してください。原稿はワープロで作成し、図表を含め、できるだけ仕上がり紙面に近い形で原稿を作成してください。
- 分量
研究論文 20 枚以内
実践報告・調査報告 16 枚以内
- 本文（英数字含む）は明朝 10 ポイント、タイトルおよび各章の見出しはゴシック 10 ポイント（太字にする必要はありません）とし、行間も統一してください。要旨、注、参考文献・資料で文字を小さくしたり、行間をつめたりしないでください。
- 句読点は 日本語は「、」「。」、英語論文では「,」「.」で統一してください（表題も含みます）。

- 注は、脚注ではなく後注にし、注の番号は (1)、(2)、(3) …としてください。
- 表番号と表題は表の上、図番号と図題は図の下に記載してください。
- 原稿は片面印刷にし、両面印刷にはしないでください。

3. 参考文献・資料

- 参考文献の書き方は、以下の基準に従うこと。
 1. 論文原稿の最後に、章番号をつけずに参考文献という見出しをつける。資料を載せる場合は、参考文献の後に、資料という見出しをつける。
 2. 参考文献は、日本語による文献（以下、日本語文献）と、外国語（英語、中国語など）による文献（以下、外国語文献）とを、それぞれまとめて、日本語文献、外国語文献、の順に記載する。
 3. 日本語文献は、第一著者の姓の五十音順に配列し、外国語文献は第一著者の姓のアルファベット順に配列する。
- 各文献で記載すべき情報は、およそ次の通りです。
 1. 単行本<単著、共著>の場合：著者、発行年、書名、出版社名
 2. 単行本<分担執筆>の場合：分担執筆者、発行年、当該章の題名、編者、書名、章番号、出版社名、ページ
 3. 学術論文の場合：著者、発行年、題名、雑誌名、巻または号、ページ
 4. 学会発表予稿集（論文集）の場合：著者、発行年、題名、予稿集名（論文集名）、ページ
 5. 教科書の場合：著者、出版年、教科書名、出版社名
 6. インターネット情報の場合：当該情報が記載されている HP などのアドレス
- 記載例
 1. 単行本<単著、共著>の場合
 横山紀子（2008）『非母語話者日本語教師再教育における聴解指導に関する実証的研究』ひつじ書房
 Anderson, J. R.（1983）. *The architecture of cognition*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
 2. 編著書中の論文の場合
 松見法男（2002）「第二言語の語彙を習得する」海保博之・柏崎秀子（編）『日本語教育のための心理学』第6章 新曜社 pp.97-110
 MacWhinney, B.（1989） Competition and connectionism. In B. MacWhinney, & E. Bates (eds.), *The crosslinguistic study of sentence processing* (pp.422-457). New York: Cambridge University Press.
 3. 学術論文の場合
 宇佐美洋・森 篤嗣・広瀬和佳子・吉田さち（2009）「書き手の語彙選択が読み手の理解

に与える影響——文脈の中での意味推測を妨げる要因とは——」『日本語教育』140号、48-58.

小柳かおる（2002）「Focus on Form と日本語習得研究」『第二言語としての日本語の習得研究』第5号、62-96.

Papagno, C., Valentine, T., & Baddeley, A. D. (1991) Phonological short-term memory and foreign-language vocabulary learning. *Journal of Memory and Language*, 30, 331-347.

4. 学会発表予稿集（論文集）の場合

迫田久美子・松見法男（2005）「日本語指導におけるシャドーイングの基礎的研究（2）——音読練習との比較調査からわかること——」『2005年度日本語教育学会秋季大会予稿集』、241-242.

5. 教科書の場合

日本花子・東京次郎・大阪美子（編）（2006）『上級者のための日本語（2）——読解編——』日本語教育書房

6. インターネット情報の場合

日本語教育投稿規定 < <http://wwwsoc.nii.ac.jp/nkg/journal/j-yoryou.htm> >